

「配慮」「主張」に視点を当てた児童の人間関係形成能力の育成に関する研究

—養護教諭と学級担任が連携して行うソーシャルスキルトレーニングの実践を通して—

教育相談室 長期研修生 養護教諭 古田 まみ

【要 約】

愛媛県学校保健会養護部会研究部が実施した健康相談に関する調査によると、多くの児童が人間関係について悩んでいることが分かる。そこで、本研究では、「配慮」「主張」に視点を当てた人間関係形成能力育成プログラムを作成し、養護教諭と学級担任が連携してソーシャルスキルトレーニングを実施した。その結果、児童の「配慮スキル」「主張スキル」が向上し、意識に変容が見られたことから、人間関係形成能力育成プログラムの有効性が示された。

【キーワード】 人間関係形成能力 配慮スキル 主張スキル ソーシャルスキルトレーニング

1 研究の目的

これまで勤務してきた学校において、保健室に来室する児童を支援してきた中で、友人関係での悩みによる相談、不登校やトラブルが原因で学級に入れない児童への対応など、人間関係による課題が多くあった。また、平成28年度に愛媛県学校保健会養護部会研究部が実施した健康相談に関する調査の結果でも、保健室来室に背景要因がある児童生徒の具体的課題は、「人間関係に関すること」が最も多いことから、児童生徒が人間関係について悩んでいることが明らかになった。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別活動編には、よりよい人間関係を形成するために、「学級や学校生活において互いのよさを見付け、違いを尊重し合い、仲よくしたり信頼し合ったりして生活すること」と示されている。児童のよりよい人間関係形成のためには、特に、「配慮スキル」（相手の気持ちを理解して思いやること）と「主張スキル」（自らの考えを正しく伝えること）を高め、そのスキルを集団の中で意識して活用させることが重要であると考えた。

そこで、本研究では、「配慮」「主張」に視点を当てたソーシャルスキルトレーニングを取り入れた人間関係形成能力育成プログラムを作成し、研究協力校の第6学年68人を対象に、9月から11月にかけて実践することとした。その際、養護教諭と学級担任が連携してプログラムの実践を行うことで、学級全体の中で個別に支援をしたり、ソーシャルスキルをより理解させたりすることができるのではないかと考えた。実践後は、「配慮」「主

張」に視点を当てた人間関係形成能力育成プログラムが、児童の人間関係形成能力の育成に有効であったかを検証することとした。

2 研究の内容

(1) 文献による研究

ソーシャルスキルの「ソーシャル」は「人間関係に関すること」、「スキル」は「知識や経験に裏打ちされた技術、技能」を意味する（國分、2004）。ソーシャルスキルを習得するための訓練のことをソーシャルスキルトレーニング（以下「SST」という。）という。また、ソーシャルスキル教育とは、心理療法で開発されたSSTの手法を学校教育などの教育場面に応用していくことである。その目的は、子どもの学校適応を支えるとともに、将来、社会に出た時を見通して、子どもが人間関係の問題を抱えないためのソーシャルスキルを育成することにある（小林、2000）。そのSSTは、五つの流れで構成される（表1）。

表1 SSTの流れ

流れ	内容
インストラクション	目標となるスキルの重要性を理解させる。
モデリング	適切な行動をモデルとして提示したり師範したりする。
リハーサル	適切な行動を練習で試みる「行動リハーサル」を行う。
フィードバック	「行動リハーサル」の良い点や改善点を指摘する。
定着化	学んだスキルを日常場面で使い定着化を図る。

(2) 人間関係形成能力育成プログラムの作成

「配慮」「主張」に視点を当てたSSTと事後活動からなる人間関係形成能力育成プログラムを作成した（表2）。SSTは、佐賀県総合

教育センター（2010）の活動プログラムを参考に、「関係開始」「関係維持」「関係発展」「関係解決」の四つの区分で構成した。事後活動は「スタータイム」と名付け、「配慮スキル」「主張スキル」を日常場面で使い、定着を図ることを目的としてプログラムに配置した。各活動の評価規準は、「配慮スキル」「主張スキル」の目標に沿って作成した。

表2 人間関係形成能力育成プログラム

区分	流れ	活動内容	評価規準
関係開始	活動1「ソーシャルスキルを学ぼう」	○ソーシャルスキルアンダグメントの結果から学年の傾向を知る。 ○人間関係に関する技能にソーシャルスキルがあることを理解する。 ○気持ちのよい挨拶について理解させる。	○ソーシャルスキルの内容を理解している。 ○気持ちのよい挨拶を積極的に実践しようとしている。
	学年集会 多タイム	○気持ちのよい挨拶のポイントに気を付けて取り組むことができたか振り返る。	
関係維持	活動2「あたたかい言葉かけ」	○これまでの自分の言葉かけについて振り返る。 ○自分の発する言葉が相手にどのような影響を与えているかに気付く。 ○温かい言葉かけについて理解する。 ○本時の活動を振り返り、これからの個人目標を決定する。	○温かい言葉かけについて理解している。 ○相手の状況を受け止めて温かい言葉かけをしようとしている。
	学級活動① スタータイム	○日常生活を振り返って、相手の気持ちを肯定的に受け止め、温かい言葉をかけることができたか振り返る。	○相手の気持ちを理解して、思いやることができている。 ○自分の考え（温かい言葉かけ）を正しく伝えることができている。
関係発展	活動3「上手な断り方」	○これまでの断り方を振り返る。 ○相手の立場に配慮しながら、自分の気持ちを正しく伝える断り方にはどんな方法があるか理解する。 ○断り方を活用しながら、どのような断り方を考える。 ○本時の活動を振り返り、これからの個人目標を決定する。	○断り方の特徴と上手な断り方のポイントを理解している。 ○上手な断り方について関心を示し実践しようとしている。
	学級活動② スタータイム	○ワークシートを用いてトラブルの事例を基に「上手な断り方」を考えて解決策を決める。	○相手の気持ちを理解して、思いやることができている。 ○自分の考え（断る理由や自分の意思）を正しく伝えることができている。
関係解決	活動4「トラブルの解決策」	○トラブルの経験に基づいて解決策について振り返る。 ○トラブル解決の手順について理解する。 ○トラブルの事例に対して、解決方法を多く考える。 ○問題を解決し、よりよい人間関係を築くことを解決策と認め、これからの個人目標を決定する。	○トラブル解決の手順を理解している。 ○相手の気持ちを理解して、効果的な解決策を考えようとしている。 ○自分の考えた解決策を正しく伝えようとしている。
	学級活動③ スタータイム	○事例のトラブルについて解決策を考え、自分の生活で、トラブルの解決策を実際に使えた場合を認識して振り返る。	○相手の気持ちを理解して、思いやることができている。 ○自分の考えを正しく伝えることができている。

(3) 連携シートの作成

プログラムの実践に当たっては、養護教諭と学級担任が児童についての共通理解を図り、児童が意欲的にSSTに取り組めるようにすることが必要であると考えた。そこで、養護教諭と学級担任が共通理解を図ることを目的に、シート1「役割分担・予定編」、シート2「単元計画編」、シート3「指導案立案編」の三つのシートからなる連携シートを作成した。

(4) 人間関係形成能力育成プログラムの実践

プログラムの実践に際しては、連携シートを活用して、学級担任は学級全体の指導に当たり養護教諭は配慮の必要な児童に個別に支援をするなど、授業の中での役割分担を明確にした上で、SSTを取り入れた実践を行った。

ア 活動1「ソーシャルスキルを学ぼう」

インストラクションでは、身に付けてほしい「配慮スキル」「主張スキル」の内容を示し、ソーシャルスキルが人間関係を円滑にする技能

であることを理解させた。モデリングでは、気持ちの良い挨拶を教師が示した。リハーサルでは、モデリングで示した挨拶を踏まえて、挨拶の練習をさせた。フィードバックでは、リハーサルの良い点や悪い点について意見交換をさせた。スタータイムでは、実生活で気持ちの良い挨拶ができるよう、学習内容の振り返りを行い、スキルの定着を図った。

イ 活動2「あたたかい言葉かけ」

インストラクションでは、温かい言葉と冷たい言葉について考えさせた。モデリングでは、温かい言葉掛けを教師が示した。リハーサルでは、モデリングを踏まえて温かい言葉掛けの練習に取り組ませた（図1）。フィードバックでは、リハーサルの良い点や悪い点について意見交換をさせた。スタータイムでは、実生活で温かい言葉掛けができるよう、授業内容の振り返りを行い、スキルの定着を図った。



図1 リハーサルの様子

ウ 活動3「上手な断り方」

インストラクションでは、児童自身の断り方について振り返りを行わせた。モデリングでは、攻撃的・非主張的・主張的の3種類の断り方を教師が示し、自分がどのタイプに当てはまるのかをこれまでの言動から想起させた。リハーサルでは、友達と意見交換をさせることで、自分の考えを広げさせながら、上手な断り方の練習をさせた。フィードバックでは、リハーサルの良い点や悪い点について意見交換をさせた。スタータイムでは、実生活で上手な断り方が実践できるよう学習内容の振り返りを行い、スキルの定着を図った。

エ 活動4「トラブルの解決策」

インストラクションでは、児童が経験したトラブルについての事前調査を基に、トラブルの事例を提示した。モデリングでは、トラブル解決の手順を示しながら解決策について理解させた。リハーサルでは、提示した事例を基に、自分の解決策を考え、友達と意見交換をさせることで新たな解決策に気付かせた。スタータイムでは、実際に起こったトラブルや教師が用意した事例について、効果的な解決策を考えさせる活動を取り入れ、スキルの定着を図った。

(5) 実践の検証

ア 結果

(7) ソーシャルスキル尺度による評価

鹿児島県総合教育センター（2018）が作成した、「配慮」16項目「主張」16項目、全32項目の4件法で構成されるソーシャルスキル尺度を利用した。プログラムの実践前後で児童のソーシャルスキル獲得状況がどのように変化したか比較した結果、「配慮スキル」「主張スキル」共にスキル得点の向上が見られた（図2・図3）。

さらに中央値の差の検定（ウィルコクソンの符号順位検定）を行った結果、「配慮スキル」「主張スキル」共に有意に上昇していることが示された。また、個別支援を行った児童のスキル得点は、「配慮スキル」が18点から29点に、「主張スキル」が20点から23点に向上した。

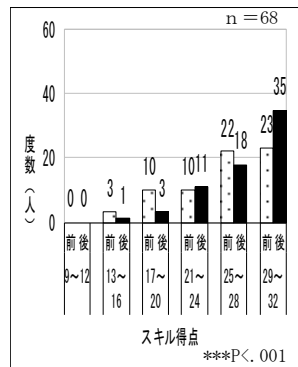
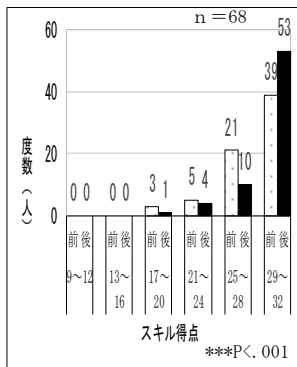


図2 「配慮スキル」得点の前後比較

図3 「主張スキル」得点の前後比較

(4) 各活動の自己評価

各活動後にルーブリック評価による自己評価を行った結果、「配慮スキル」に関する質問「相手の気持ちを理解して思いやることができたか」及び「主張スキル」に関する質問「自分の考えを正しく伝えられたか」についての自己評価が向上した（図4・図5）。個別支援を行った児童の自己評価においても、「配慮スキル」では、「よい」から「たいへんよい」に、「主張スキル」では、「もう少しがんばろう」から「よい」に変容していることが分かった。

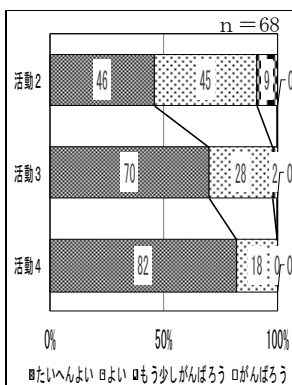


図4 「配慮スキル」の自己評価

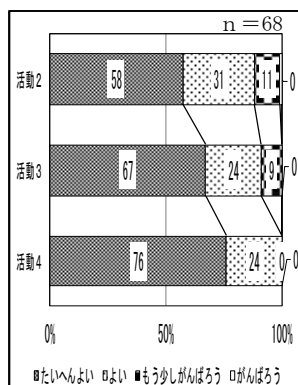


図5 「主張スキル」の自己評価

(7) 各活動後の児童の感想

各活動後の児童の感想から、「配慮スキル」「主張スキル」に対する意識に変容が見られたものを以下に示す（表3）。

表3 各活動後の児童の感想

活動1	○ 恥ずかしがっていた挨拶を今では、気持ちよくできるようになりました。挨拶で、一日の始まりの気分が変わるんだと思いました。
活動2	○ 声掛けだけで、相手の気持ちや周りの雰囲気が変わることに驚きました。普段使っている何気ない言葉が相手を傷付けているかもしれないので、これからは意識していきたいと思いました。
活動3	○ 断り方によって相手の気持ちが変わることが分かりました。上手な断り方が普段の生活で使えることができたなら、クラスの雰囲気も変わると思います。 ○ 断り方が悪くてトラブルになってしまうことが多かったので、上手な断り方を生かしたいです。
活動4	○ 友達と食い違いがあって大げんかになってしまったけれど、その時ちゃんと解決策を考えていればよかったと思いました。これからは、心の信号（立ち止まって考えよう）も生かして生活していきたいです。

(1) 学級担任への児童の実態に関する聞き取り調査

学級担任からの聞き取りにおいて、樋口耕一（2018）が開発したK H Coder3を用いて、逐語録中の頻出語の特徴や関連性を計量的に分析した。さらに、言葉の出現パターンの共起をリンクしたり、ネットワーク内の各要素がどの程度中心的な存在であるかを示したりする共起ネットワークによる分析も行った。その結果、抽出語数が多かった「相手」「気持ち」「考える」の語の出現を「配慮スキル」と捉えた。また、「学ぶ」「言う」「伝える」の共起関係に着目し、「考え」「自分」「言える」の語を合わせて「主張スキル」と捉えた。「意識」「授業」「修学旅行」の語の出現は「学びを生活に生かそうとする姿」として捉えた（図6）。

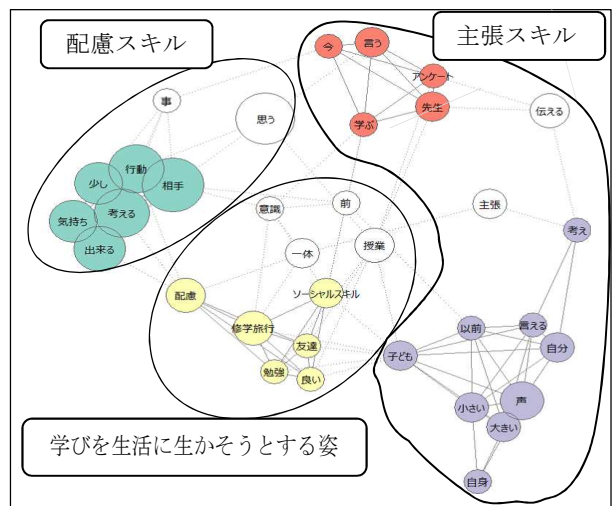


図6 学級担任への聞き取り調査の分析

㊦ 学校環境適応感尺度による評価

栗原ら（2018）が開発した、全34項目5件法で構成される「学校環境適応感尺度」（以下「アセス」という。）を用いて、児童の学校環境適応感を計測した。アセスの三つの適応領域のうち、対人的適応感に含まれる「友人サポート因子」と「向社会的スキル因子」が他の因子より向上した（図7）。

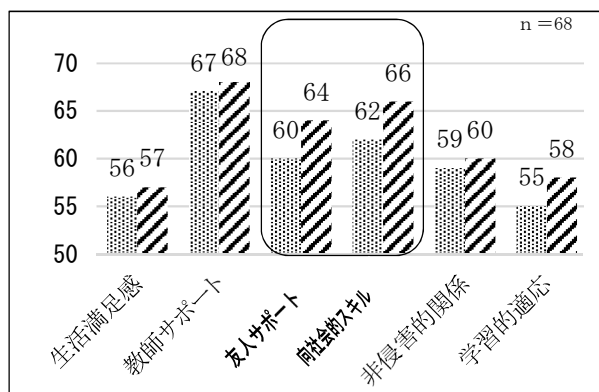


図7 学校環境適応感尺度の結果

イ 考察

児童の課題をインストラクションで伝えて、題材を自分に関わりのあることとして捉えさせ、SSTの流れに沿った授業を継続したことは、児童の「配慮スキル」「主張スキル」の向上につながったと考える。また、「スタートタイム」において学んだスキルを実生活で実践したことや、各活動後のルーブリックによる自己評価を実施したことは、児童の「配慮スキル」「主張スキル」の意識を高めることにもつながった。各活動後の児童の感想から、「配慮スキル」「主張スキル」についての意識に変容が見られたことは、児童が、これまでの言動を振り返りながら「配慮スキル」「主張スキル」を自分の生活に関連させて捉えることができた結果の表れであると考えられる。

さらに、聞き取り調査の結果によると、学級担任はプログラム実践後の児童の姿から、学級の一体感や「配慮スキル」「主張スキル」の向上を実感している。このことは、本プログラムを修学旅行前に実施したことで、児童が、集団生活において、学んだスキルを活用しながら「配慮スキル」「主張スキル」を向上させた結果であると捉えた。ここでも、各活動後に実施した「スタートタイム」による、児童のソーシャルスキルに対する意識の高揚が奏功したと考える。また、学校環境適応感を計測するアセスに

おいて、「友人サポート因子」と「向社会的スキル因子」が他の因子より向上したことは、児童がよりよい人間関係形成のためのスキルの高まりを感じている結果の表れだと考える。

このことは、養護教諭と学級担任が連携し、養護教諭が各活動の中で個別の支援を充実させることによって、より多くの児童に、日常生活の中でよりよい人間関係を形成しようとする意識を持たせることにつながった結果だと捉えた。

3 研究のまとめと今後の課題

「配慮」「主張」に視点を当てた人間関係形成能力育成プログラムを養護教諭と学級担任が連携して実践したことで、児童の「配慮スキル」「主張スキル」の向上や、よりよい人間関係を形成しようとする意識の向上につながった。また、その成果は、児童の友人サポートや向社会的スキルの向上にもつながっている。これらのことから、人間関係形成能力育成プログラムは、児童の人間関係形成能力の育成に有効であることが実証された。

今後は、スキルの獲得に向けてSSTの活用場面を検討したり、学校行事との関連を図り、どの時期に実践するかなど、年間計画への位置付けについて検討したりする必要がある。また、「配慮スキル」と比較して「主張スキル」の獲得がやや困難な傾向にあったことから、他のソーシャルスキルを加えながら実践することで児童の人間関係形成能力を高めることが期待できるのではないかと考える。

主な参考文献

- 小林正幸「カウンセリングに学ぶ友だちづくり 役に立つ知識と技術 ソーシャルスキルをどうやって身に付けるか」『児童心理54』号 金子書房 2000 P63-68
- 國分康孝『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる』 図書文化 2004
- 佐賀県総合教育センター「よりよい人間関係を築く力を育成する支援の在り方」 2010 http://www.sagaed.jp/kenkyu/kenkyu_chousa/h23/06%20kyouiku-soudan/index.html (参照2019.5.7)
- 鹿児島県総合教育センター『鹿児島県総合教育センター研究紀要 第122号』 2018
- 栗原慎二『アセスの使い方・活かし方』ほんの森出版 2018
- 樋口耕一「KHcoder 3」 2018 <https://kncoder.net/> (参照2019.11.15)